

学会ニュース

目次

・第32回大会について	1
・共通論題「趣=味」趣旨説明	安西信一	2
・オイコノミアの系譜学によせて	大田一廣	3
・ロバート・ベイジとルーナー協会	鈴木美津子	5
・事務局より	7

第32回大会について

今年度の第32回大会は、2010年6月26日（土）、27日（日）に新潟大学で開かれる予定です。開催校責任者は逸見龍生会員です。

共通論題は「趣=味」で、コーディネーターは安西信一会員です。27日（日）を充てる予定です。（次ページの趣旨説明をご覧ください。）

今回はレクチャー・コンサートの代わりに、逸見会員のご尽力により、新潟を舞台とした江戸期古浄瑠璃が上演される予定です。どうぞお楽しみに。

また、懇親会では18世紀の日本料理の再現も行われる予定です。

詳しくは同封のプログラムをご覧ください。

多くの会員が大会に参加されることを願います。ご出欠は同封のはがきでお知らせください。

5月27日（木）までに事務局までご返送ください。

第32回大会共通論題：「趣＝味」

趣＝味（taste、goût、Geschmack）—味覚と美的判断能力の交錯 （趣旨説明）

安西信一（東京大学）

カント『判断力批判』（1790）に代表されるように、十八世紀のヨーロッパでは、美的判断能力としての「趣味」を巡り盛んな議論が行われる。十八世紀はまさに「趣味の世紀」（G. Dickie）であった。

言うまでもなく、この「趣味」を表わすヨーロッパ語、taste、goût、Geschmack等の原義は「味覚」である。それは十七世紀フランスを中心に、美的芸術的な領域にも転義的に用いられ始め、ヨーロッパ全体に定着してゆく。その際、元来の「味覚」の要素は、一般に抑圧・無視される傾向にあった。プラトン、アリストテレス以来の長い伝統では、「味覚」は諸感覚の中でも最も身体的で低級なものの一つとされ、「味覚」の快楽にふけることは道徳的墮落につながる忌むべきこととされた。ここからすれば、美的判断能力としての「趣味」を巡る十八世紀ヨーロッパの議論の中で、「味覚」の側面が抑圧・無視されたとしても不思議はない。

しかし同時に、この抑圧された「味覚」は、様々な形で当時の「趣味」論に入り込んでいたと思われる。そもそも美的判断能力を表わすため、低級感覚の「味覚」を転義的に用いたという事実は、快楽、非合理性、直接性、主観性といった、伝統的にはまさしく感覚としての「味覚」の地位を低めるとされた諸要素が、実は、美的な領域において主導的・積極的な役割を果たすようになったことを意味する。しかも、ガダマーが「趣味」の意義を考える際に強調した通り、この「趣味」は、（少なくとも十八世紀前半には）単なる美的領域を超え、道徳的領域にもまたがる総合的判定能力ともされた。それゆえある意味で、十八世紀ヨーロッパにおける「趣味」論の隆盛は、抑圧された身体性の全体的な復権を目指す現象とも見做せよう。

他方、十八世紀ヨーロッパでは、「美食学」といった形で、元来の「味覚」自体を復権する様々な試みもなされる。いわば「味覚」を美的な「趣味」へ高める試みである。同様の傾向は、別の文脈ではあるが、同時代の日本にも認めうる。これら十八世紀における「趣味」と「味覚」との多様な交錯を揚挾すること。これが本シンポジウム全体のテーマとなる（それは当然予想されるように、決して容易な課題ではないが）。シンポジウムのタイトルに「趣＝味」という見慣れない表記を用いたのもその趣旨による。

私自身の報告では、フランス、ドイツ、イタリア、日本を扱う他の報告者が主題的には取り上げない重要な地域、すなわちイギリス（ブリテン）における趣味論を簡単に概括しておきたい。カントの美学が先行するイギリス美学に多くを負っていたことがよく示す通り、十八世紀のイギリスでは極めて多くの趣味論が書かれる。有名なもののみ挙げても、シャフツベリ、アディソン、ヒューム、ジェラード、リード、アリソン、ナイトなど。その多様な展開をスケッチしたい。

なお、本シンポジウムの報告者の一人で、このたび辻静雄食文化賞を受賞された奥村氏は、料理の実践家としても高名であり、前日に行われる本大会の懇親会で、十八世紀の日本料理を再現してくださるとのことである。詳細は未定だが、そちらもあわせてご賞味いただきたい。

オイコノミアの系譜学によせて

大田 一廣 (阪南大学)

しばらく前に、水村美苗『日本語が亡びるとき』をめぐっていくらかの議論があったようだが、この本が言語エリート主義の賛美につながるかどうかはともかく、この種の言葉をめぐる思考に接していつも思うことがある。いずれにせよ<われわれ>は日本語から離れられないという事実をどういうふうに考えておくべきだろうかという問題だ。

18世紀近代の、いわゆる啓蒙期フランスの政治や“経済”や社会をめぐってすこしばかり思索をつづけてきたわたしとしては、ソシュール以降の近代言語学の流儀のなかで、ヴィトゲンシュタインの言語ゲーム論やサールの言語行為論などにいたる言語を参照項とする思考のスタイルから学んできたつもりであるけれど、ここにたってこの言語ないし言葉をめぐってやや穏やかならぬ事態に直面し、急いで“再定義”を余儀なくされている。

M. フーコーによるコレージュ・ド・フランス講義録（とくに『安全、領土、人口』1977-78年講義）の公刊とこのフーコーの問題提起をうけたG. アガンベンのオイコノミア論 (*Il Regno e la Gloria*, 2007) の“衝撃”が事の発端だ（アガンベンの難解な本書はつい最近邦訳された。高桑和巳訳『王国と栄光』青土社、2010年）。近代の社会は、事物と人間を同一のシステムないし「装置」(dispositif) をつうじていかにして合理的に統治するようになったのかという問いなのだが、この問いにたいする応答は「オイコノミア」(oikonomia, oeconomie, économie) という概念をどのように考えるか——問題は一にかかってここにあるとわたしには思われる。

エコノミーは現代日本語では、日常的な通用語にしても学問上の“ジャーゴン”にしても、ふつう「経済」——その概念の内容と範囲と可能性は触れぬとして——と訳されているが、このエコノミーにかんする多少ともまとまった思考はほぼ18世紀のヨーロッパに始まっている。ところが、フーコー/アガンベンによるオイコノミアの神学論によれば、F. ケネーないしケネー・サークルに典型的ないわゆる自由主義の自己統治モデルは神学的思考を考慮する必要があるというのだ。エコノミーが「神学的な意地悪さ」や「宗教的神秘化」をとまなうという後年のK. マルクスの言説は別にして、フーコー/アガンベンの眼をもって18世紀フランスのオイコノミアないしエコノミーを観ると、ある種の傾向が浮かび上がってくる。その特徴を挙げれば、エコノミーの概念は流動的で多様な意味と用法に晒されているといえるように思う。

F. ケネーがoeconomie animale (1736) 論で医学界にデビューしたことは知られているが、『精神論』の著者エルヴェシウスの父、国王主席顧問侍医エルヴェシウス (1685-1755) に梅毒や天然痘を扱った *L'idée générale de l'oeconomie animale* (1722) がある。その際、いずれについてもoeconomieを“経済”と発想したのでは原意をおおきく損ねるだろうし、また植物の「二名式命名法」の案出者リンネにも *Oeconomia Naturae* (1749) というラテン語の論文があって、そのなかで *Oeconomia divina* (1744) という本の参照を求めるとともに、植物の配置と調和という「性体系」が神の配剤と計画の顕現であるという立場を表明している。

『百科全書』の項目、ルソー執筆の *Economie ou Oeconomie* (1755) とその単行書 *Discours sur l'économie politique* (1758) も“経済”とは端的に訳し難い。後者をルソーのプランにしたがって「社会体制論」(中川久定)とする提案もある。ルソーの場合は、エコノミーは“経済”よりも、むしろ「統治」のニュアンスが強いだらう。この「統治」の観点をとれば、F.ケネーのいう *gouvernement économique* は“経済”による統治あるいは統治による“経済”というように理解する方向もありうる。『百科全書』にはさらに、ジョクール、ミュニユレ・ド・シャンボー、ブーランジェがそれぞれ、神学的エコノミー(モーゼのエコノミー、福音書のエコノミー)、機械論的な動物のエコノミー、幸福を達成させる技術と学問としてのエコノミー・ポリティークなどを論じていて、エコノミーの神学的モチーフとその構造も配慮されている。エコノミーの概念とその限定がなお流動的であることがわかる。

『百科全書への問題提起』のなかでヴォルテールが論じている *économie de paroles, parler par économie* (1771) という項目は、彼一流のサティールや韜晦を含めてさらに複雑な読解を要すると思われる。高橋安光による苦心の邦訳は「言葉の経済」(『哲学辞典』法政大学出版会、1988年)とされているが、節約や効率といった“経済”の通用的意味や市場原理主義を標榜する新古典派的なイメージからの発想ではヴォルテールの意趣はたぶん汲み取れないだろう。

たとえば、聖アウグスティヌスが *par économie* と語っているとヴォルテールがいう場合、問題になっている論点は「三位一体」論とその説明の手法についてなのだ。キリスト教神学の「三位一体」(三位格)論は、グノーシス派が創造としての神と救済としての神、世界の外にある超越の神と世界の内部で活動する神とを弁別し両者は一致しないとして「一神教」の存立基盤に“風穴”を開けたことにたいして、ナジアンゾスのグレゴリウスなどカッパドキアの教父たちが神の配剤としての「超越のオイコノミア」を対置したことに由来するという知見からすれば、このオイコノミアとは神による世界の救済計画の別名ということになる。しかも、オイコノミアというギリシャ起源の言葉がラテン教父たちによって *dispositio* とその類語に翻訳されることをつうじて、やがてこのラテン語が装置や配剤を意味するフランス語 *dispositif* の縁語として機能してきたというのだ。オイコノミアをしかじかの「装置」をつうじた世俗における神による救済という文脈においてみれば、それを「経綸」と訳すことも可能であることになるだろう(文語訳『聖書』「パウロ書簡」など)。おそらくヴォルテールはこういうオイコノミアの神学的な文脈を想定していたに違いないというのが、わたしの見通しである。

<オイコノミアという問題>は「近代的統治」の可能性の条件(救済の理念と装置のシステム)をヨーロッパの歴史的な学統と精神と制度にそくしてどのように考えることができるかということになるだろう。この観点から見れば、構造史ないし概念史に一時代を築いたとおもわれる O.ブルンナーがすでに論文「<全き家>と旧ヨーロッパの<家政学>」(1968年)のなかでオイコノミアをテルトゥリアヌス以降のキリスト教神学の歴史的な文脈で考えることを提案していたことは、あらためて想起されるべきことかもしれない。さらに、アガンベン「装置とは何か?」(2006年。G.ドゥルーズにも「装置とはなにか?」1989年がある)の「装置」論のモチーフにしたがえば、いわば生活世界の統治論的構造がどのように生成したかをフランス社会史研究の成果を踏まえつつ18世紀フランスのポリス論に探ることも必要になってくるだろう。オイコノミア論はわたしの考えでは、“啓蒙の再定義”につながってゆくはずなのだが、どうだろうか。

ロバート・ベイジとルーナー協会

鈴木美津子（東北大学）

最近、十八世紀後半に活躍したロバート・ベイジ（Robert Bage, 1728-1801）の小説をわくわくしながら読んでいる。ジェイン・オースティン（Jane Austen, 1775-1817）がベイジの代表作『ハームスプロング、あるいはあらぬがままの人』（*Hermesprong; or, Man as He Is Not*, 1796、以下『ハームスプロング』と略記）の初版を所有していたことを知り、好奇心に駆られて読み始めたのがそもそものきっかけである。ベイジの作品は全部で6冊あり、すべて匿名で発表されている。『ヘネス山』（*Mount Henneth*, 1782）、『バラム・ダウンズ』（*Barahm Downs*, 1784）、『美しきシリア女』（*The Fair Syrian*, 1787）、『ジェイムズ・ウォレス』（*James Wallace*, 1788）、『あるがままの人』（*Man As He Is*, 1792）、そして『ハームスプロング』である。作品を読み進めるうちに、すっかりベイジのファンになってしまった。

ベイジの小説は、十八世紀後半に全盛だった感傷小説や政治小説とは、かなり趣を異にしている。当時の小説には稀な、明るさ、軽快さ、のびやかさ、明晰さに満ちあふれ、そして諧謔と自由の精神が横溢しているからである。愉快で洗練された作風はいかにして形成されたのか。ベイジのいかなる経験に因るのか。素朴な興味に駆られ、彼の生涯を辿るべくピーター・フォークナー（Peter Faulkner）の評伝『ロバート・ベイジ』（*Robert Bage*, 1979）を繙いてみた。しかし、ベイジの前半生はあまり詳らかではない。ほとんど記録が残っていないからである。確かなことは、イングランド中北部ダービー（Derby）郊外の小さな町ダーリー（Darley）に生まれ、父親が製紙業者で非英国国教徒であること、スタッフォードシャー（Staffordshire）のエルフォード（Elford）にある製紙工場を購入し、父親と同じく製紙業を営んだこと、23歳でエリザベス・ウーリー（Elizabeth Woolley）と結婚し、三人の息子に恵まれたことぐらいである。

ベイジの後半生は、前半生とは打って変わって、かなりはっきり分かっている。終生の友となった、バーミンガム（Birmingham）の出版業者であり作家でもあったウィリアム・ハットン（William Hutton, 1723-1815）宛ての書簡が残されており（バーミンガム公立図書館蔵）、書簡の中でベイジ自身が自分のことをかなり詳細に記しているからである。二人の交友は、ハットンがベイジの製紙工場から紙を購入したことから始まった。仕事上の取引が、いわば友情へと発展したのである。ハットンとの交際は、ベイジの中年以降の記録を残すことを可能にしただけでなく、ベイジの交友関係を大きく広げ、ベイジが後に作家として立つ際の精神的な基盤、さらには小説の素材をも提供したのである。ハットンは啓蒙主義者の集まりであるバーミンガムのルーナー協会（Lunar Society）の会員であった。ベイジはハットンを通して、ミッドランド地方の指導的立場にあったルーナー協会の会員との親交を深めることとなる。ルーナー協会の会員は科学界、産業界、哲学界の錚々たる人物たちであり、化学者で神学者のジョゼフ・プリーストリー（Joseph Priestley, 1733-1804）、製造業者で陶芸家のジョサイア・ウェッジウッド（Josiah Wedgwood, 1730-95）、医師、生理学者、博物学者にして哲学者、詩人という実に多彩な才能の持ち主であるエラズマス・ダーウィン（Erasmus Darwin, 1731-1802）、時計職人、技師、地質学者のジョン・ホワイトハース

ト（John Whitehurst, 1713-1788）などである。とりわけ、エラズマス・ダーウィンとは親しく、鉄工場を共同で経営していた時期もあり、二人の友情はベイジが死去するまでおよそ40年間続いた。そもそも、工場経営者として充実した生活をおくっていたベイジが晩年になって小説執筆に手を染めることになったのにも、エラズマス・ダーウィンが大いにかかわっている。ダーウィンたちと共同経営していた鉄工場が経営破綻し、多額の損失を出し、この痛手から気を紛らわすために、小説を書き始めたのだから。

ベイジとルーナー協会の会員たちとの交友関係を知って、既成概念や因習に囚われない、実に知的で明晰なベイジの作風の由来の一端がわかったような気がした。バーミンガムのルーナー協会の面々は、人間の理性の力、明晰な思考、調和と均衡、寛容を重じていた。進歩を礼賛し、奴隷制度を弾劾し、人間の権利を主張し、旧体制を攻撃し、フランス革命を擁護した。ベイジは、これら啓蒙主義者や急進主義者そして非英国国教徒たちとの交流を通して、政治的自由主義、宗教的寛容さ、そして相対主義と出会った。ベイジの6作品において、貴族、国教会の牧師、弁護士などの腐敗墮落、卑俗性や頑迷固陋ぶり、階級的俗物根性などが暴かれ、社会慣習や体制が揶揄され、批判されるのも、当然と言えよう。しかし、ベイジの体制批判は、ウィリアム・ゴドウィン（William Godwin, 1756-1836）、トマス・ホルクロフト（Thomas Holcroft, 1745-1809）、メアリ・ウルストンクラフト（Mary Wollstonecraft, 1759-97）などの急進主義小説によく見受けられるような、独善的な教条主義には陥らない。皮肉と機知と上質のユーモアに包まれて、実に爽やかで伸びやかなのである。小説に漂う軽やかで洒脱な雰囲気は、体制批判や社会慣習攻撃をおこないながら、同時に陳腐な文学的常套手段を揶揄するというベイジの編み出した手法・戦略に因るのかもしれない。この戦略の集大成が『ハームスプロング』である。

小説修業中の21歳のジェイン・オースティンが、文学的な戯れと体制批判の見事な結実である『ハームスプロング』に出会い、大いに笑い、啓発され、そして作家魂を刺激されたであろうことは想像に難くない。『ハームスプロング』読了後10月に、『高慢と偏見』（*Pride and Prejudice*, 1813）の前身の『第一印象』（*First Impression*）の執筆が開始された。ジェイン・オースティンは、ベイジから学んだ文学的戦略・手法、形式、人物造型などを巧みに換骨奪胎し、『高慢と偏見』の中に明るく、軽快で、輝かしい作品世界を構築したのである。



事務局より

2011年グラーツ大会情報

国際18世紀学会の第13回大会は2011年7月25日（月）から7月29日（土）まで、オーストリアのグラーツで開催されます。

大会関連のサイトがすでに開設されています（www.18thCenturyCongress-Graz2011.at）のでご覧ください。

なお、開催地の関係上、国際18世紀学会の2つの公用語（英語、仏語）のほか、今回はドイツ語でも発表できるようです。

日本からも多くの会員が参加されることを期待します。

国際18世紀学会の名簿について

今まで、国際18世紀学会の名簿は各国学会やヴォルテール財団を通じて更新されていましたが、今では各会員が自分で変更を入力する方式になっています。昨年、事務局でチェックしたところ、誤ったデータ（すでに退会した会員のデータ、名前の誤表示など）が多数見つかりましたので、わかる範囲内で事務局で訂正いたしました。新入会員の方、連絡先等に変更のあった方はなるべく自分でご自分のデータを更新してください。詳しくは国際18世紀学会のサイトをご覧ください。（画面上部のISECS-Directというボタンをクリックすると名簿にアクセスできます。）

なお、国際18世紀学会からの通知はメールで届くことが多くなっているので、なるべくご自分のメールアドレスを登録しておいてください。

投書欄について

この「学会ニュース」に投書欄を設けることにしました。2つの欄を予定しています。

- ・学会や事務局への意見、提案、希望など。
- ・掲示板：研究会の呼びかけ、行事の広告、情報提供の依頼（たとえば「『〇〇』という本を探しています」など）。会員同士の連絡にご利用ください。

いずれも事務局まで。

共通論題のテーマ、および書評対象図書

会員からの提案を随時受け付けています。事務局または担当幹事まで。（ただし、共通論題のテーマ決定に際しては開催校の希望が優先されるので、必ずしもすぐにご提案が実現するとは限りませんが、事務局から開催校や幹事会に伝達します。）

学会ニュースのエッセー

今のところ、事務局から執筆をお願いしていますが、会員の皆さんからの希望も受け付けています。執筆を希望される方は事務局までお知らせください。（編集の都合上、9月号は6月末までに、12月号は9月末までに、4月号は1月末までにご希望をお寄せください。）

年会費

日本18世紀学会の年会費は5,000円です。年会費について証明をご希望の方は、ホームページ「会則及び役員選出に関する細則」附則の項を印刷してご利用ください。

会費納入のお願い

学会ニュースの発送とあわせて、会費の払い込み用紙を同封させていただきます。未納分のある方には、その年数に応じた金額を印字した用紙を送らせていただいています。学会の活動は皆様の会費によって支えられています。事務局におきましても円滑な学会運営のため身を引き締め変わらず努力する所存ですが、会員の皆様にはどうか苦しい学会の財政事情をご理解いただき会費納入にご協力をお願い致します。

すでにご存じと思いますが、一般の銀行から郵便振替口座への入金もできるようになりました。なお、事務局の移転にともない、新しい郵便口座を開設しました。番号は以下の通りです。

00950-2-178903 名義：日本18世紀学会

旧事務局（東大美学研究室）の口座は廃止されたので、その番号が印刷された以前の振込用紙はもう使えません。

新入会員の方へ

毎年6月の幹事会で入会を承認された方はその年度からの会員となります。6月の幹事会以降に入会を申し込まれた方は12月の幹事会で承認され次年度からの会員扱いになりますので、会費の請求はありませんが、他の会員同様に諸種の配布物をお届けいたします。

新会員の勧誘のお願い

ぜひ18世紀研究に関心のある方を本会にご勧誘ください。入会申込用紙は日本18世紀学会ホームページからダウンロードできますので、よろしくごお願いいたします。

メーリングリスト

日本18世紀学会では学会や研究会のお知らせ、ヴォルテール財団からの連絡などをメールによって会員の方々にお知らせしております。ご希望の方は事務局までご連絡をお願いいたします。なお、現在事務局からメールをお送りしてもお届けできない会員の方がいらっしゃいます。ご希望にもかかわらず、メールをお受け取りになっていない方はお手数ですが、事務局までご連絡をお願いいたします。また、メールアドレスを変更された場合もお知らせください。

幹事会メンバー(50音順)：安西信一、井田尚、伊東貴之（東アジア交流担当）、王寺賢太（国際幹事）、小田部胤久、笠原賢介、川島慶子、小穴晶子、関谷一彦（常任幹事、年報担当）、田邊玲子（常任幹事、年報担当）、寺田元一（国際学会執行委員）、長尾伸一（東アジア交流担当）、中山智子（常任幹事、総務・会計）、服部典之（常任幹事、年報担当）、堀田誠三、増田真（代表幹事）、吉田耕太郎（常任幹事、年報担当）

会計監査：中島ひかる 濱下昌宏

日本18世紀学会ニュース 第63号 2010年4月発行

発行者 日本18世紀学会 代表者 増田 真

事務局 〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学文学部 増田（仏文）研究室

e-mail: jsecs@bun.kyoto-u.ac.jp

tel. / fax: 075-753-2766

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsecs/>